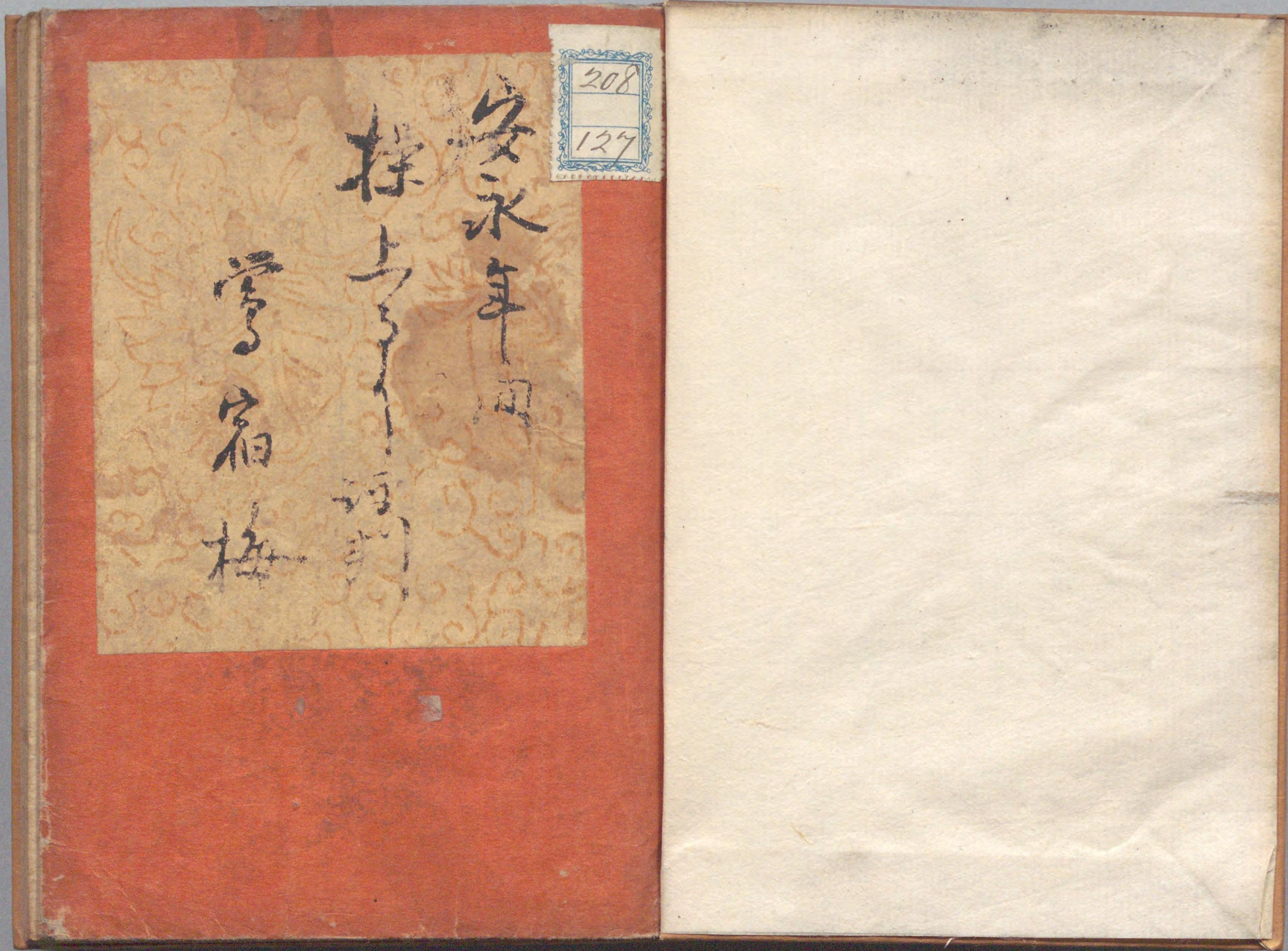
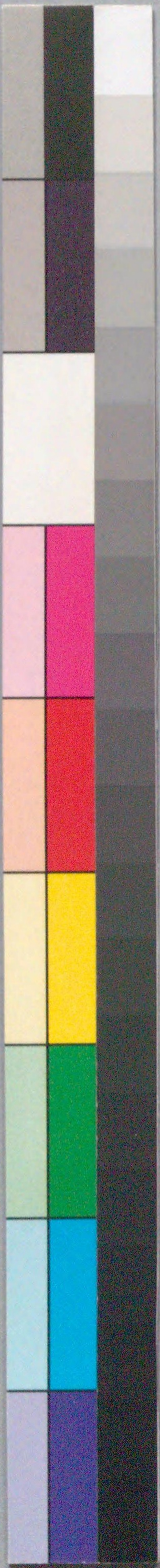


国立国会図書館 操上るり評判鶯宿梅 208-127



ガラス使用



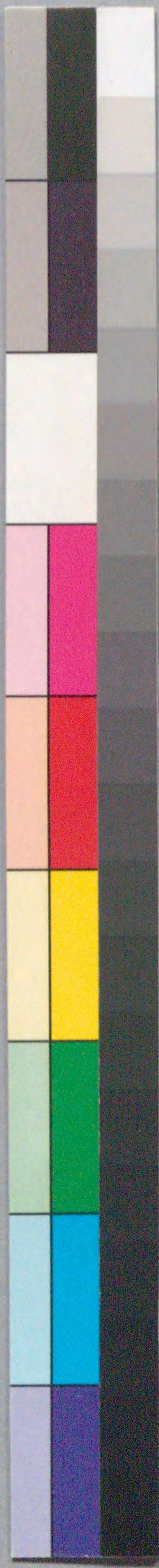
208
127

安永年間
梅宿鶯評判上
字篇梅

国立国会図書館 操上るり評判鶯宿梅 208-127

ガラス使用





序

それ上る里を 伝者此は

一七方の

小めが

いづれを

入道

父の

おも

おも

侍く



いゑる艶女のつゞきと尚更此方の流白
もよほりれ名目つゞき既に流白と角波の
ちちうふと二味小合世々世々流布し
江戸をまた乃ゆりくゝる流布り河東此
一曲小唄へ古傳年記ゆゑ一申豊後
又此のつゞきおむき歌くの流
ゆゑあるゆりゆりゆけと竹本を竹
れすゝ系さくゝお江戸へ志あり
湯入の人れをづうの出語歌ゆゑさ乃
ともぐらひおむきめのけいこふさく

竹量乃ゆきふゆゑらふふいまや
お江戸採二粒れまんじやうを又二味線
乃若人佳よとくゝふ下りその形
くの形とらりやあとの若者身り
うちまことふさふさ志志神若れらふ
ゆゑゆゆゆとあまの流音しこ
なこの時りをも又あふすあたま
き宿梅と歌しとらりれ流
まんふあまの流音し



三芝居藝品定二の藝文評判

来月又日よのきん

後者東花王 全三冊

附、嵐雛助と女房役刺細件入

作者 虎水

竹本 外題年代記

英彦河原の題詞の方又月終の巻物
水来の御書

先述より巻物一巻の
内より外題を記す

操上るり評判寄宿梅

さうい所 豊竹肥後極元 豊竹東流

同 豊竹極元紀元 豊竹新元

元更月

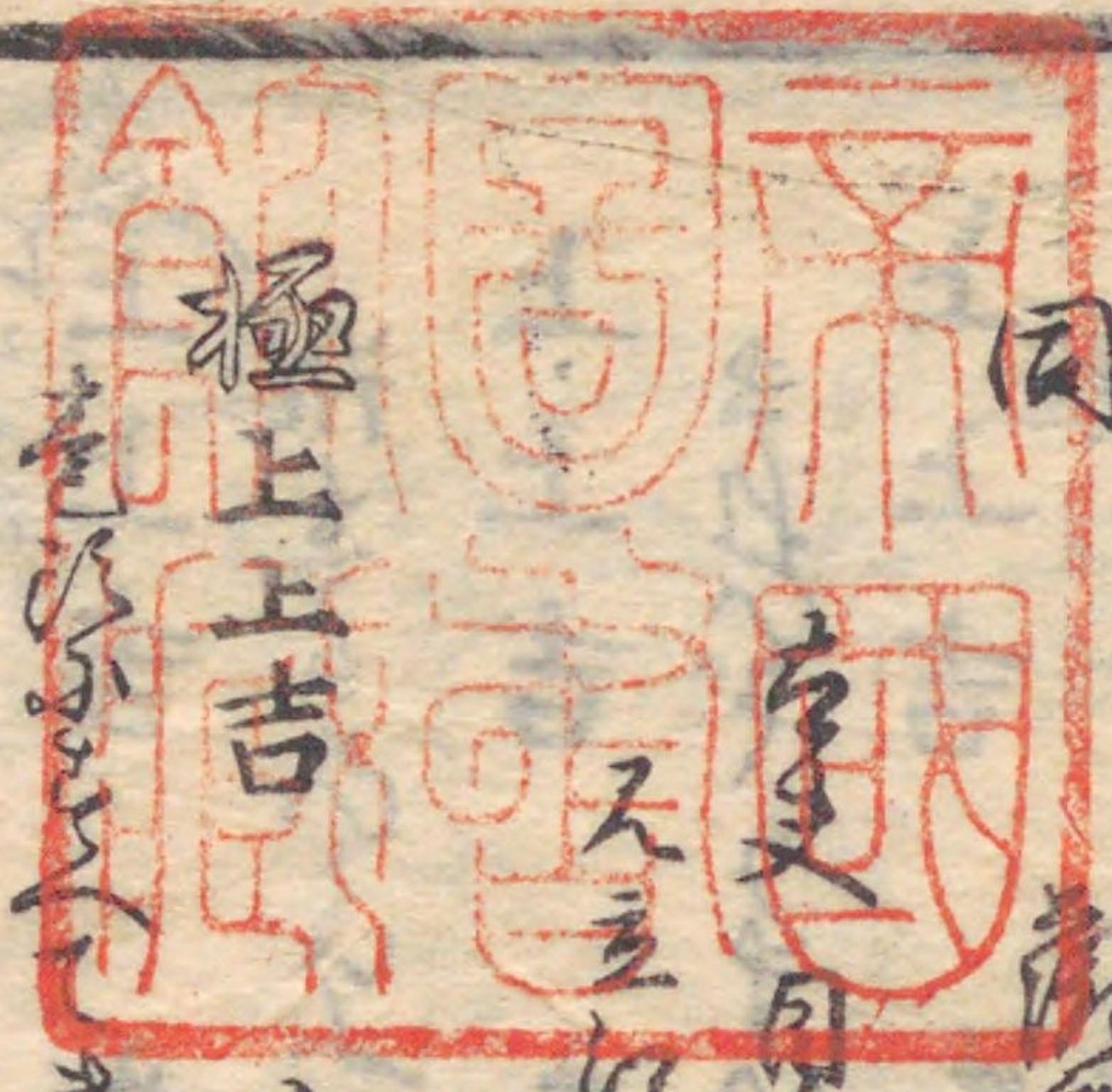
元更月 元更月 元更月

極上上吉 豊竹元吉 妙紀元

豊竹元吉 豊竹元吉 豊竹元吉


真上上吉 豊竹元吉 元吉

元吉 元吉 元吉





次上上吉 豊竹筆を文 紀前所

上上吉  豊竹駒を文 外紀所

上上吉 豊竹肉返を文 紀前所

上上吉 豊竹鳴を文 曰

上上吉 豊竹出水を文 曰

かりたお下りあきよといふは河上のおり

上上吉 豊竹村を文 曰

上上士 豊竹百合を文 外紀所

上上吉 豊竹伝説を文 曰

上上 豊竹友を文 紀前所

上上 豊竹七を文 曰

るでよまらうとさうらうこれある相撲よりかき

上 上 上 上 上 上 上 上 上

萱竹花志 萱竹衣代 萱竹布 萱竹廣 萱竹作 萱竹中 萱竹路 萱竹高 萱竹校 萱竹町

能記 能記 能記 能記 能記 能記 能記 能記 能記 能記

上 上 上 上 上 上 上 上

萱竹念 萱竹折 萱竹多 萱竹折 萱竹久 萱竹志

能記 能記 能記 能記 能記 能記

上上 萱竹念 能記
上上 萱竹折 能記
萱竹多 能記
萱竹折 能記
萱竹久 能記
萱竹志 能記
りつでもよくちりぐと賣れます田舎所の江敷子



上上吉
上上士
上上士
上上十
上上
上上
上上
上上
上上

野次店治市
野次蘇治市
野次蘇治市
野次蘇治市
野次蘇治市
野次蘇治市
野次蘇治市
野次蘇治市
野次蘇治市

日
日
日
日
日
日
日
日
日

上上吉
上上吉
上上吉
上上吉
上上吉
上上吉
上上吉
上上吉
上上吉

豊竹治
豊竹和
豊竹蘇
豊竹蘇
豊竹蘇
豊竹蘇
豊竹蘇
豊竹蘇
豊竹蘇

日
日
日
日
日
日
日
日
日

多田松久

三浦源の部

巻註





上上 上上 上上 上上
 野沃 仁三布 日
 野沃 市次布 日
 野沃 久布 日
 野沃 店布 上
 野沃 繁布 上
 野沃 壹布 上
 野沃 二布 上
 野沃 久布 上
 野沃 十七八
 野沃 森代八
 野沃 修布
 野沃 店布
 野沃 平布

外記注
 野沃 小三布 上
 野沃 久布 上
 野沃 店布 上
 野沃 繁布 上
 野沃 壹布 上
 野沃 二布 上
 野沃 久布 上
 野沃 十七八
 野沃 森代八
 野沃 修布
 野沃 店布
 野沃 平布
 功上上吉 野沃 富八 外記注
 産元郡
 上上吉 豊竹 桑治
 豊竹 新支
 以上

摺と上巻

豊竹伝を文

加代社

尺書あり曰 何れも方へらは合もいまだん予が一紙あて
北伝を巻以ふすましくごうごうでもごうごう海
いふとある 尺書曰 数年未ニケの付の何やうを
尺書あり曰 大正の先せき出大徳のくもあし
非うを人坊を中ませうたつ入のくありはを
るし 昭和元申の年くと是く大坂後一社
此南伝北伝たくりしれ一時は非小松の三の
口の夜又あふ年の二の中まはつらととも

こき物あれどもありしういふごごごりま
まはら南伝ふあしご海りてた方しくふ
ゆらうつげと今まはつとゆてりし
まやうあんがう此のあれはとてはり
はげとあんまりやまきーらあまはれ
あしこの切ら大のあまきつうふ字をせし
くしあまきまはあまがらうらごをあまら
ひんあまら福んやのあま年とすあし
北出しとあまらあまらあまらあまら
北もあまらあまらあまらあまらあまら

9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 5 6 7 8 9 5

のつらあはれどす一のつらあはれどす人あはれどす
うらなれどす一のつらあはれどす人あはれどす
うらなれどす一のつらあはれどす人あはれどす
のつらあはれどす一のつらあはれどす人あはれどす
うらなれどす一のつらあはれどす人あはれどす
うらなれどす一のつらあはれどす人あはれどす
うらなれどす一のつらあはれどす人あはれどす
うらなれどす一のつらあはれどす人あはれどす
うらなれどす一のつらあはれどす人あはれどす

真上吉

豊竹伝書

北野庄

おつらあはれどす一のつらあはれどす人あはれどす

おつらあはれどす一のつらあはれどす人あはれどす
うらなれどす一のつらあはれどす人あはれどす
うらなれどす一のつらあはれどす人あはれどす
うらなれどす一のつらあはれどす人あはれどす
うらなれどす一のつらあはれどす人あはれどす
うらなれどす一のつらあはれどす人あはれどす
うらなれどす一のつらあはれどす人あはれどす
うらなれどす一のつらあはれどす人あはれどす
うらなれどす一のつらあはれどす人あはれどす
うらなれどす一のつらあはれどす人あはれどす

ガラス使用

国立国会図書館 操上るり評判鶯宿梅 208-127

とあつていふの方すふまうせまするたふ女後の
二夜はいびきふまうお母の死と後をての夫入
ちのりう角力の世後もまう何と治るは
もめていふいふ人の獨角力も春むし一頃
七つ目を傷切めく女房つていとおあつ
のうら傷うらふまういふいふ

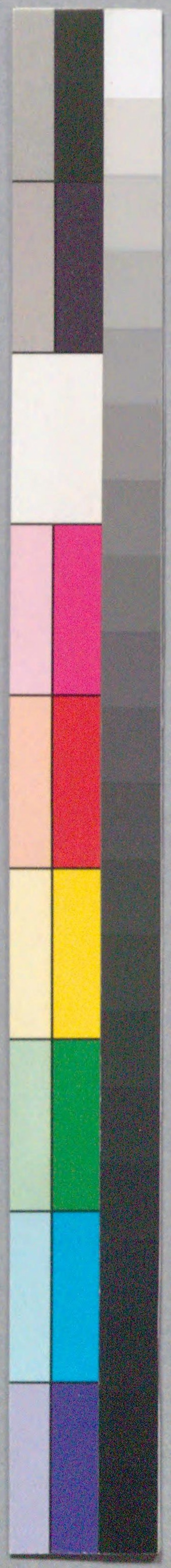
久上吉

豊竹等々

北斎

世の人の流ふらういふの格うらも夫とある事と
知ふ流格とらんども地づくのあつてる斗で

まういふ眼あふいふいふいふいふいふいふ
合せていふいふいふいふいふいふいふいふ
流れてもいふいふいふいふいふいふいふいふ
の流るるいふいふいふいふいふいふいふいふ
あつていふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
中のはいふいふいふいふいふいふいふいふ
うせまはいふいふいふいふいふいふいふいふ
川戸の流あつていふいふいふいふいふいふ
扇舟流あつていふいふいふいふいふいふいふ



一曲いさりのいりよおしつるをなめ

上上吉

豊竹駒を丈

ぬれ庄

若人曰富貴ハ新美彦ノ生駒を丈父の若翁をついで
下られよ一はあふひ一が是おつけて教諭を丈の
お江戸へおくりしれし事とひいせびをや一むく
の若とありぬて若人うふ若おんうふすむしつる
寛保二年壬戌の年うむ此れお梅庄へ大坂教公
を竹城前梅豊竹駒を丈と梅縁竹伏高田常人
飛若竹系九常也者豊本宗補筆者豊松右七
人曰及中てりしうむ世村が駒をの初らの江戸勢

あり豊本宗補此新とるり此年の内四りと一りうむ
田村の此年合戦とて一たり主府のよ物いああ
着行系九常也者豊本宗補也つるあふひいふまうり
二月より新化る梅山強装初七は徳川の切が駒を
の役場おき大坂よりいさりぬ月止して一は若翁
の事とひいして被る駒駒を丈着行豊本宗補を丈
坂へ来りしつるは寛延二七年不問づく此年經一
かりけ時能若と知息長彦のよるり初ら江戸表み
てい下たり初七能若と知息長彦の役回く九能若成
治りて今此歌の大つりして是年中の尺牘の月



を記しらるる海峯の標記のむらり筆を推し考し
却あつて山科のからがとに記しらるるありしや
この標記は持巻のこの切大出本館伊集のふ形を
お取寄書二布きひ大で記しらるる、又とみし記す
いふち跡く定う又室鷹古申年よりけ長古坂の
後後社一すき知元社一りり以家史記をいふと一
程の大で記しらるる、こもせすしと書備た若
のこの切を記しと大なりしと若人あて後後を
みせつけ大を記しりり、さるより伝記記と
大で記しらるる、さるより記しらるる、明和

三戌の年ふりしと記し、和泉式部新橋橋のこ
の切大出本あつてこの標記は、尾尾の改目と
記し、さるより記し、大なりしや、廿年を記
月大出本記し、さるより記し、さるより記し、
一史の記述あり、一寛保二年の知下、さる
明和二年まで二十五年のち、さるより記し、
れ、さるより記し、さるより記し、さるより記し、
一、さるより記し、さるより記し、さるより記し、
人あり、さるより記し、さるより記し、さるより記し、
記し、さるより記し、さるより記し、さるより記し、



も何一ツもさびしき中にも双峰の
茶屋の候大出来と後者美なりけ合時育心
のこの候いさむらね春さむのまよとむらむの
たてしむ時北お庄の世勤ひつ一廻のい
目したる一いさ古大お極とるんて一あめから
様出さくはてしむらつらつらうくあめ
あめとがーもせ合とてさく

と吉

豊竹の書

北条庄

初めの名ハお徳を更とめて北お庄へおりの村
出候のこころ書置の候とてまへく

ふりさうゆいそのおおき体も多く
さくくおらもいさむらつらつら
ぬきおらさうらおとてお徳を更と後後致
さけてお徳はふおらさくお徳の書置の書置を
法ん物のかんせん今ふいさくお徳を更と
しむらむらお徳を更とてお徳の書置を
お徳を更とてお徳を更とてお徳の書置を
お徳を更とてお徳を更とてお徳の書置を

上上吉

豊竹の書

北条庄

あふまお徳を更とてお徳を更とてお徳の書置を



ほあつゝもいふに、おれはかゝるに、なほなほとん
も、いふに、おれはかゝるに、なほなほとん
ふ、いふに、おれはかゝるに、なほなほとん
いふに、おれはかゝるに、なほなほとん
いふに、おれはかゝるに、なほなほとん

上上 豊竹修持を更 外

三、竹の修持を更とあれし、おれは、なほとん
いふに、おれはかゝるに、なほなほとん
いふに、おれはかゝるに、なほなほとん
いふに、おれはかゝるに、なほなほとん
いふに、おれはかゝるに、なほなほとん

上上 豊竹友を更 托

あ、の、く、ら、お、れ、は、か、ゝ、る、に、な、ほ、な、ほ、と、ん
いふに、おれはかゝるに、なほなほとん
いふに、おれはかゝるに、なほなほとん
いふに、おれはかゝるに、なほなほとん
いふに、おれはかゝるに、なほなほとん

上上 豊竹七を更 日

あ、の、く、ら、お、れ、は、か、ゝ、る、に、な、ほ、な、ほ、と、ん
いふに、おれはかゝるに、なほなほとん
いふに、おれはかゝるに、なほなほとん
いふに、おれはかゝるに、なほなほとん
いふに、おれはかゝるに、なほなほとん



入るにありしが、是れは、其の人のまよひを、
 よるに、其のまよひを、其のまよひのまよひに、
 らるに、其のまよひのまよひに、
 のまよひのまよひに、
 も、其のまよひのまよひに、
 其のまよひのまよひに、
 あれ、其のまよひのまよひに、

其のまよひ

其のまよひ 豊竹東治

そも、其のまよひのまよひに、
 其のまよひのまよひに、
 其のまよひのまよひに、
 其のまよひのまよひに、
 其のまよひのまよひに、
 其のまよひのまよひに、
 其のまよひのまよひに、
 其のまよひのまよひに、
 其のまよひのまよひに、
 其のまよひのまよひに、



あの名ありしがたは赤梅の身ふき竹新門とらつふ
年の昔のりしつて實曆千三年春にたつ梅枯て年法
實上は西ののりしとぬし一量竹ふきを文ありり
之候中古にたつひ合大出事しとて同日ゆゆ年花
合戦と出候ししつりし時年千六也てあつて
初この見物目見しとて縁の長村津若お勤むあり
年々つてあつて一軒家といふ名とありの文はく物死
たえのりしとて病死してさつふは法親也此は松葉
古影をまきふとまきといひしが師匠の若とつてまき
はまきよりたえと成此は松と成ありするともあり
もゆきふしとらつてあつてさつふを年おつてさつ
松昌別とて南春を養も早くゆきと松葉の
たつり入る養年あつてもそのお勤むとて松く
りしとて元氣に赤梅枯す子の取あつてさつ
たえをたつてさつて一回しつてはれのみとてさつ
松昌まきとてさつ竹のしつとわさつとてさつ
と松目かお春とてさつひまき

梅宿判字宿梅 古



初事等はつひとまざるも春に花を結し法を
 新よりひく頃の致刻ふ出いせれ河の方音を更
 我も二月十日病死しし執事の茶の中に入あり
 泣きしてさるわいふ人なり一室をたす年をたえ
 竹中佐助を又た他の三辰奥の法をいし時日月の
 名音梵の三の切音を更執事とていありしを
 梨りの山根松も軍一くをたすりていさるも年
 岳落友社の勅めぬ一が二とい年々ぬ流りありや
 依人ともいひさる大をいふありまはしはしいしちうごの當
 上よりいひせぬ小法を去く一わたりぬがさる

冷きまらるるあついでこのなき又久法をいし一箇のう
 向とありりいませい

本空院称音日證信士 丑二月十日
 俗名竹本音太夫

寺の法名一んが克法寺

十七回忌

蒼竜院松岩平町居士 明和三年四月廿日

藝名名護屋播磨守更

寺の法名新寺町東岳寺也 門外山法七
 延君ス



津のてあぐら古入播大吏明和二年四月廿日
 死志いへりまて本年十七回ふ成まする忠告お
 もとほるふとる一まら世揚列へふ身の名物お
 おく清人成きつうふ成るを更でござりまする
 こと一延享五年北紀誌えと竹中七吏跡せし時
 初めと南地りり刈田文は其孝のよりおて書
 子智鏡の内おく出格りあえりて一孝がうと中
 ちやりい教のりおて諸名為虎のたまふおあうれ
 せし一まらおは声ふおく止まり大内鑑の北紀おふ
 勘卒の場おと大でりり一社業姓(まかりて名

菅原の北紀目おお標のこのお北紀目のおの標門乃
 是紀い北紀のこい文おとつう北紀おらりりお北紀浦
 記まは北紀おおと伝りお物お後まてとておとせま
 乃北紀北紀北紀の九孝文の北紀北紀おお合大てま
 六北紀北紀北紀おと伝りお物お後まてとておとせま
 三人北紀北紀北紀おと伝りお物お後まてとておとせま
 うとせりお物おおと伝りお物お後まてとておとせま
 おとせりお物おおと伝りお物お後まてとておとせま
 の浦の北紀おと伝りお物お後まてとておとせま
 みの伝りおと伝りお物お後まてとておとせま



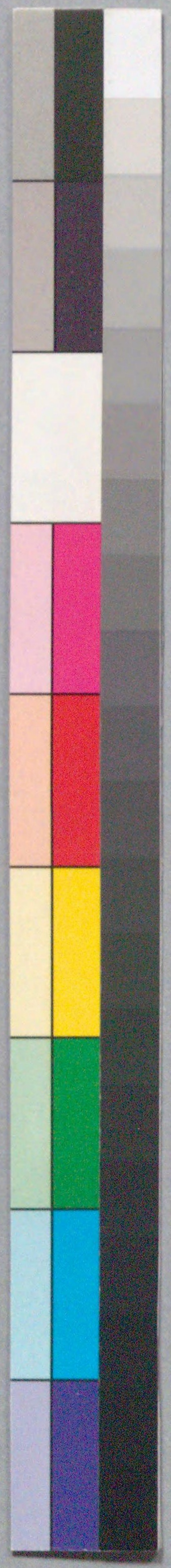
208
127

ふりかへしつゝ父の遺言をよみしむるに
ふりかへしつゝ揚子江のほとり

安永十五年 江戸 春日

本町 町目 之 坂町

書 鋪 中 山 清 七 板

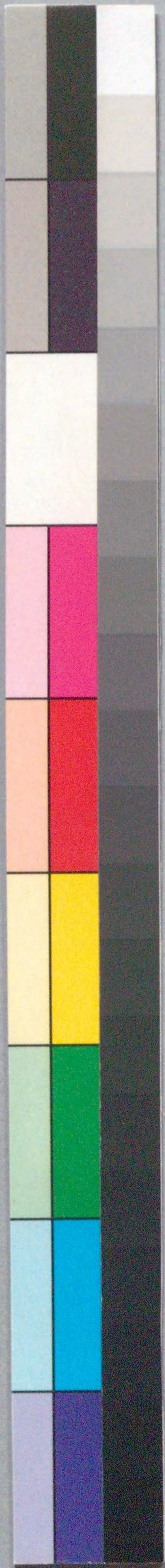


208
127

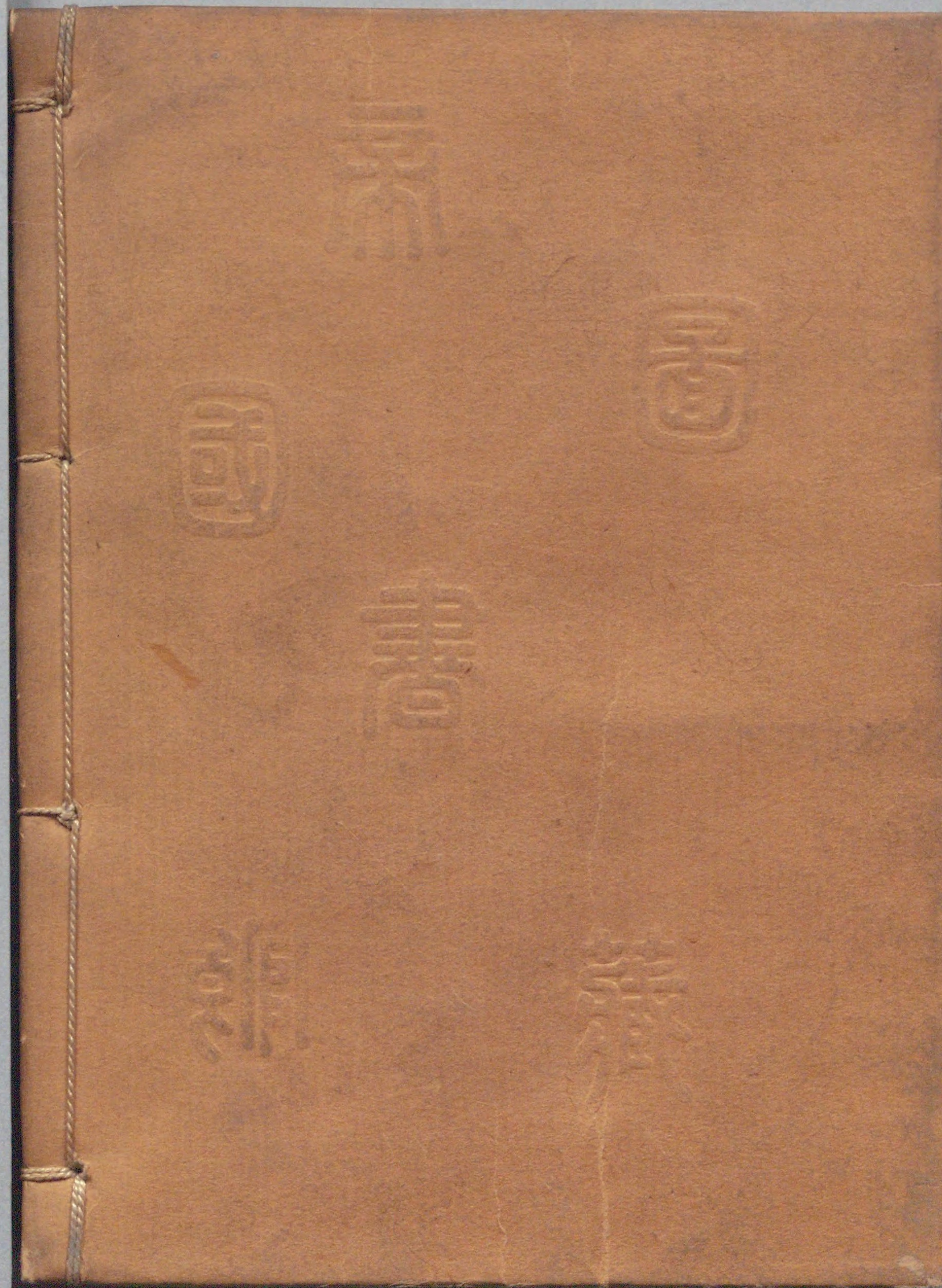
国立国会図書館 操上るり評判鶯宿梅 208-127

ガラス使用

9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50



国立国会図書館 操上るり評判鶯宿梅 208-127



ガラス使用

